

# 災害支援者SCTにおけるイメージの検討

— テキストマイニング分析を用いて —

堀 口 真 宏

## 要 旨

2011年3月に起こった東日本大震災多くのの人々に甚大な被害をもたらした。本研究は、被災された方に対して支援を行っている災害支援者を対象に調査を行った。そこでは、災害支援者が「支援」に対してどのようなイメージを有しているかについて65名を対象にSCT（文章完成法）を実施し、テキストマイニングによる分析を行った。分析方法は、対応分析、共起ネットワークの分析をおこなった。そこでは、災害支援者の「支援」に対するイメージについてPTSD傾向の高低という観点からも考察を行った。その結果、PTSD傾向高・低群での支援に対するイメージに相違が見られた。まず、PTSD高群においては、お互いに支援しようというような意味をもつ「相互的支援」に関するコードが多く見られたが、一方の低群においては、「仕事」「有能感・達成感・動機」といったコードが多く見られた。さらに、今回の調査では、支援者自身が被災した経験が有意に多い ( $\chi^2(1) = 28.4, p < .001$ ) という結果となり、彼ら独自の支援におけるシステム構築の必要性が示唆された。

## 問題と目的

本論文は、東日本大震災における被災者を対象とした災害支援者として活動している人を対象にSCT（Sentence Completion Test, 文章完成法）作成を試み、ことばによる支援のイメージを検討することを目的とする。

2011年3月に起こった東日本大震災は、未曾有の出来事であり、実に多くのの人々に様々な影響を与えた。また近年多くの災害が続いており、2018年9月に起こった北海道胆振東部地震、2019年9月に起こった佐賀県集中豪雨、台風の影響による千葉県の大規模停電などなど、多くの支援者が赴いている。

東日本大震災の発生当時、防潮堤の水門操作や住民の避難誘導など、津波が迫る中で危険な任務に従事した岩手、宮城、福島3県の消防団に対し、総務省は「心のケア」の専門家チームを派遣することを決定した。3県の消防団員の死者・行方不明者数は計249人にも上り、総務省は被災地で活動した消防団員について、心的外傷後ストレス障害（posttraumatic stress disorder: PTSD）などの対策が必要と判断した。これまでは自治体の消防本部に所属する消防士が対象で、仕事を持ちながら「後方支援」を担う消防団員に実施するのは日本でも初めてといえる（2011年6月11日、読売新聞、朝刊、東京版）。このように、被災者のみならず、救援者に対してもこころのケアの必要性を国が判断し、動

いていることが伺える。つまり、助けられる立場である被災者のみならず、助ける側である救援者も同じようにストレスを抱える可能性があり、支援が必要であるということが公的に認められたといえる。

また、DSM-5（アメリカ精神医学会精神疾患・診断マニュアル第5版）によると、基準A4において「心的外傷の出来事の強い不快感をいづく細部に、繰り返しまたは極端に曝露される体験をする（例：遺体を収集する緊急対応要員）」という項目が追加された。つまり、災害救援などに関わる者も診断の対象になったということがわかる。

Raphael（1989）は「救援者も隠れた被災者」と述べており、直接の被災者だけではなく、救援活動にあたった者も大きな影響を被ることが多くの先行研究で示されている。1983年、オーストラリアで発生した大規模な森林火災においては、42ヶ月目の段階で現場活動に従事した消防職員の13%がPTSDであったと報告されている（McFarlane, A. C., Papay, p., 1992）。また、悲惨な状態の遺体の収容や、殉職者が出た場合など、通常と異なる状況下で活動した場合は、PTSDなどの心理的障害の発生率は長期に渡って高まるとの報告も多い（Ursano, R. J., Fullerton, C. S., Vance, K. et al, 1999）。このように災害救援活動は、心的外傷体験とその出来事による心理的負担をしばしば伴い、救援者のメンタルヘルスに影響を及ぼすことが明らかにされている（飛鳥井, 1999）。

災害救援者が心理的負担をこうむるのは明らかであるのに、これまでは正当な認識を払われることは少なかった（加藤・飛鳥井, 2004）。その背景には、救援者への社会的要請、および救援者自身の持つ職業意識、職業文化が影響していると指摘されている。救急隊員や災害救援隊員の間では、心理的問題が存在するという事実を認めることに対して伝統的に強い抵抗があるため、PTSDの実態がさらに曖昧にされているというのである（Mitchell, 2001）。

我が国においては、1995年の阪神・淡路大震災以来、救援者の問題についても注目されるようになった。救援者における研究は、阪神・淡路大震災に救助に向かった消防士からPTSD症状が多く見られたなどの研究（岩井, 1998, 2002；加藤, 2000）が行われるようになった。救援者に起こりうる症状としては、被災者側と同じ症状のほか、疲れやすい、集中力が欠ける、思考力の低下、作業能率の低下などの様相を呈するといわれている。加藤・飛鳥井（2004）は、阪神・淡路大震災で活動した消防職員5,103名を対象にした調査を実施し、震災当時の勤務地が、被災地であった群は、他の群に比べて心的影響が大きいことを明らかにしている。また、日常業務における消防職員の外傷性ストレス反応に関する調査も実施されている（畑中他, 2004；財団法人地方公務員安全衛生推進委員会, 2003）。

以上のようなことから、本研究では、まず、災害支援者SCTの作成を試み、東日本大震災によって被災された方に支援を行っている災害支援者を対象に調査を実施する。そこでの調査の結果から、災害支援者の「支援に対する独自のイメージ」について検討を行うことを目的とする。災害支援者に関する研究では、数量的研究によっておこなわれることが多い。すなわち、災害支援者の負ストレス状況などの心理的特徴を測る尺度への回答から、数量的分析がなされ、一般的傾向を検討することが多い。

こうした従来の方法に加え、本研究では、第一に、数量的調査の分析を補完することである。得ら

れた数量的データの分析結果を検討していく際に、SCTによる記述を参照することで、数値の解釈をさらなる根拠をもって検討することが可能となりうる（大山，2012）。そこで得られるデータは仮説生成的で探索的研究となりうるが、数量的分析に比べて厳密性は劣るかもしれないが、災害支援者における心理学的探究において示唆する点が見られることが期待される。また、災害支援者の活動の中で現実的にIES-R得点（PTSD傾向）の高低が存在する場合、具体的なことばによるイメージの差異の可能性があるかについてSCTを通して検討することを目的とする。

## 1. 災害救援者SCTの作成と実施

本調査では、災害救援者SCTを実施し、その語りについて検討を行う。質問紙調査の自由記述では、得られる回答が十分に多様性をもちつつも、ある程度一定範囲に収まるものであることが必要である。あまりにも回答の自由度が高い曖昧な質問では、回答の長さや精確さなどが統制されにくく、無回答の可能性も考えらえる。これに対して、あまりにも構造化された質問では、特定のフレームワークに従った回答が多くなり、多様に乏しくなってしまう可能性がある。

その要請に応える方法として、心理検査の投射法の一つとして用いられているSCTが挙げられる。SCTとは、「私にとって家族は」などの先行刺激文に続けて、被検査者が文章を書き加え完成させるものである。「支援について思うことを書いてください」等の自由度の高い質問項目に比べて、回答はある程度まとまったものとなりつつ、十分に多様性があることが期待できうる（大山，2012）。こうしたいくつかの条件を満たすものとしてSCTを用いることとした。

また、SCTは多様な反応を引き出せるという利点の一方で、調査協力者の意識的統制も可能であり、それによって防衛や抵抗が出やすい反面、検査の侵襲性や心理的負担からある程度自分を守ることができるという面もある（駿地，2006）。

以上の点を踏まえ、本調査は、災害支援者自身の独自の状況下での心理状態を、なるべく調査協力者に負担をかけずに無理なく実施できるという点を最優先することとした。SCTによって得られた語りを多面的に把握し、災害支援者のよりよい援助を考えていくアプローチのひとつとして意義のある方法であるとも考えられる。

災害支援者を対象にしたSCTにおいて検討したい項目として、精研式文章完成法など、これまでにある程度有効性が示されている既存のSCTや駿地ら（2006）の遺伝SCT、堀口（2012）の海岸救援者SCTなどを参考にした。

項目については、まず、自己のイメージや支援に対する自己概念を含め、どのようなイメージをもっているのかについてたずねることを目的とした。また、協力者の「私」を尊重し、その内的体験世界の「うごき」を理解するための項目を作成した。さらに、これらの項目を丁寧に扱い、そこに記された反応を深く理解していくことは、調査協力者の「私」という存在を尊重し、その主体性が立ちあられるプロセスを生み、そして守ることに通じることではないかと考えられたためである。災害支援者SCTは何より、調査協力者にとって役に立つ援助を考えるために用いるべきである。よって、調査協力者は少なからず、不安や緊張、抵抗を感じる可能性があるとも考えられる。このような状況

に対して、なるべく侵襲性の低い刺激からはじめて自然に回答できるように配慮し、調査協力者が自分のペースで主体的に検査に取り組めるようにすることが、その後の反応の信頼性にとっても、肝要であるといえる。そのための導入として、「1. 私にとって支援とは」は実際に支援活動している彼らにとって身近な刺激語であると考えられ、導入として適していると思われる。

また、「2. 心が落ち着くのは」は、被検査者が大切にしているものや、よりどころ、現在の「私」をかたちづくるイメージなどが表れると想定される。加えて、災害支援は、「生と死」に直接関わっているがゆえ、「私」をめぐる実存的な問いが生じやすいといえる。いつどこで誰が「4. 死」に至るかは、突然、災害支援者である「私」に迫ってくるものである。個人がそのような出来事をこころの内側でどのように体験し、その体験と向きあうかは、その人の死生観や人生観、運命感などが大きく関わってくると考えられうることから、項目を抽出した。また、「死」を身近に体験することを通じてその後の支援にどのような予感や直観のイメージに影響を与えているかについて理解するために「3. 予感」を設定した。

さらに、本調査では、今の気もちをさらに発展させ、どのような「5. 将来像」や未来への「6. 希望」を持っているかを理解するために最後の項目として設定した。以上のような経緯により、災害支援者SCTが作成された。項目は「1. 私にとって支援とは」「2. 心が落ち着くのは」「3. 予感」「4. 死」「5. 将来」「6. 希望」の6つである。

## 方 法

### 1. 調査対象者と調査時期

本調査において、東日本大震災による被災地のみならず、仮設住宅などに住んでいる住民に対する支援に携わっている方<sup>(1)</sup>でSCTに回答することに同意した災害支援者85名を本調査の対象とした。調査用紙には、本研究の目的、結果は統計的に扱うため対象者は特定されないことを示した上で協力依頼を明記した。調査時期は2014年4月から2015年3月であり、質問紙は郵送で配布回収され、回収率は76%だった<sup>(2)</sup>。調査用紙には、本研究の目的、結果は統計的に扱うため対象者は特定されないことを示した上で協力依頼を明記した。回答は無記名で回答者自身が封をしてから返送することとし、プライバシーの保護に配慮した。

### 2. 調査内容

① 災害支援者SCT、②フェイス項目：性別、年齢、被災経験、震災後の経験年数

(1) 被災地の自治体によって雇用されている看護師、保健師、介護士、ケアマネージャー、社会福祉士、生活支援員などを含む。

(2) 記述した以外の尺度も質問紙に記載していたが、本研究の内容に関わらないものであるため、割愛した。事前に、災害支援者が実際どのような情緒的負担を抱えているのかについて基礎的研究を行った(堀口, 2016)。その結果から、PTSD傾向が高いとされる基準値を上回った者が(IES = R25点以上の者の割合)、性別で見ると、男性で15.88 (SD = 11.3)、女性で23.1 (SD = 16.6)であり、t検定による有意差は認められなかった ( $t = 1.5, n. s.$ )。また、PTSD傾向がバーンアウトに与える影響もあることが明らかとなった。

### 3. 倫理への配慮

本研究は東洋学園大学倫理委員会により審査され、承認された（承認番号2019-05）。

## 結果と考察

### 分析対象者

災害支援者のイメージの分析については、調査対象者65名（男性12名、女性53名、平均年齢43.9歳、 $SD = 14.14$ ）を分析対象とした。また堀口（2016）で同じ対象者に対して質問紙調査を行ったPTSD傾向の尺度（IES-R）得点を群分けの際に用いた。本調査の分析対象になった65名のIES-Rの平均は19.1点であった。また、群分けの際は、この平均値から得点が高い者を高群、平均値より低い得点の者を低群とした。また、被災した経験ある・なしでは、「被災した」が54名、「被災していない」が11名となり、カイ二乗検定の結果、有意差が見られた（ $\chi^2(1) = 28.4, p < .001$ ）。

### 分析手続き

災害支援者SCTへのテキストマイニングによる分析は、フリーソフトウェアのKH Coderを用いて行った。また、テキストマイニングを用いる理由は、その特徴として、まず自由記述という大量の質的データを探索的に分析することができる点にある。また、記述された語そのものだけでなく、組み合わせられた語同士の関係も分析することができる点も挙げることができる。このような点から、本研究の目的に適している方法と考えられる。このような分析手法を用いることによって、各支援者が持つ支援のイメージを探索的に描くことによって、支援イメージが多層的に理解しうることが期待できるといえる。

分析手続きは、『KH Coder リファレンス・マニュアル』（樋口, 2014）に準拠し、分析者による視点を大切にしつつも、恣意性を排除することを念頭に置いて実施した。具体的には、恣意性を排除するため、コーディングの際、必要があればその都度原文を確認しコーディングが原文の文脈に即しているかを検証した上で、KHコーダーに精通している臨床心理士1名、教育学部卒業の1名と筆者の計3名の合議により決定を行うという手続きをとった。

#### 1. 語の抽出

記述されたデータは、誤字脱字を訂正した後、形態素分析を行い、記述された単語を品詞ごとに分類した。形態素分析とは、機械的に文章を単語に区切って抽出し、それぞれの単語の品詞を判別する分析を指す。その結果、「1. 私にとって支援とは」の総抽出語数が625、異なり語数215となった。また、「2. 心が落ち着くのは」の総抽出語数が640、異なり語数198となった。後述の直感的に頻出語を把握するための予備的な分析として自己組織化マップ、クラスター階層分析などを行う際には、2回以上出現した語を対象として視覚的に大まかに分類した後、実際にコーディング化を行う際には、単語の出現頻度の下限は設けず、1回でも出現した語であれば後の分析に含めた。また、他のSCT 4つの刺激語についても予備的分析をおこなったが、紙面上の都合により割愛した。

#### 2. 予備的分析

コーディングを行う前に、まず視覚的にイメージを掴むため、自己組織化マップを作成し、コーデ



ィング化する際の参考にした。これにより、関連の強い語ほど近くに布置されるようなマップを作成することができる。分析の結果、「1. 私にとって支援とは」では、大きく8つのカテゴリーに分類された（図1参照）。しかし、そのうち2つのカテゴリーが「手」「笑顔」を関連性がうまく見出されないうものもあった。次の「心が落ち着くのは」では、6つのカテゴリーに分類された（図2参照）。

加えて、階層的クラスタ分析を行った。この分析は、異なる性質のものが混じり合った集団から、お互いに似た性質のものを集めてクラスタを作成する手法である。分析の結果、「1. 私にとって支援とは」では、デンドログラムで表示されたものが6つのクラスタとなった。例えば、「支える」「お互い」「助け合う」といったことばが一つのクラスタとして結合していることになる。また、クラスタ数を決定するにあたり、確認のために併合水準（非類似度）の分析を行った。この結果から、プロットの軌跡をたどっていくとクラスタ数6から急に線が上がっていることが分かった。この結果を参考に、コーディング化する際の参考とした。あまりにも多くの語を一つのマップに布置すると視認することが難しくなるため、2回以上の語を布置に用いた。次に、「2. 心が落ち着くのは」においても、デンドログラムに表示されたものが6つのカテゴリーとなった。例えば、「食べる」「夕食」「趣味」といったことばがひとつのクラスタとして結合していることになる。確認のため、併合水準の分析を行ったところ、クラスタ数5から線が緩やかに上がっていることが分かった。この結果を参考にコーディングを行った。

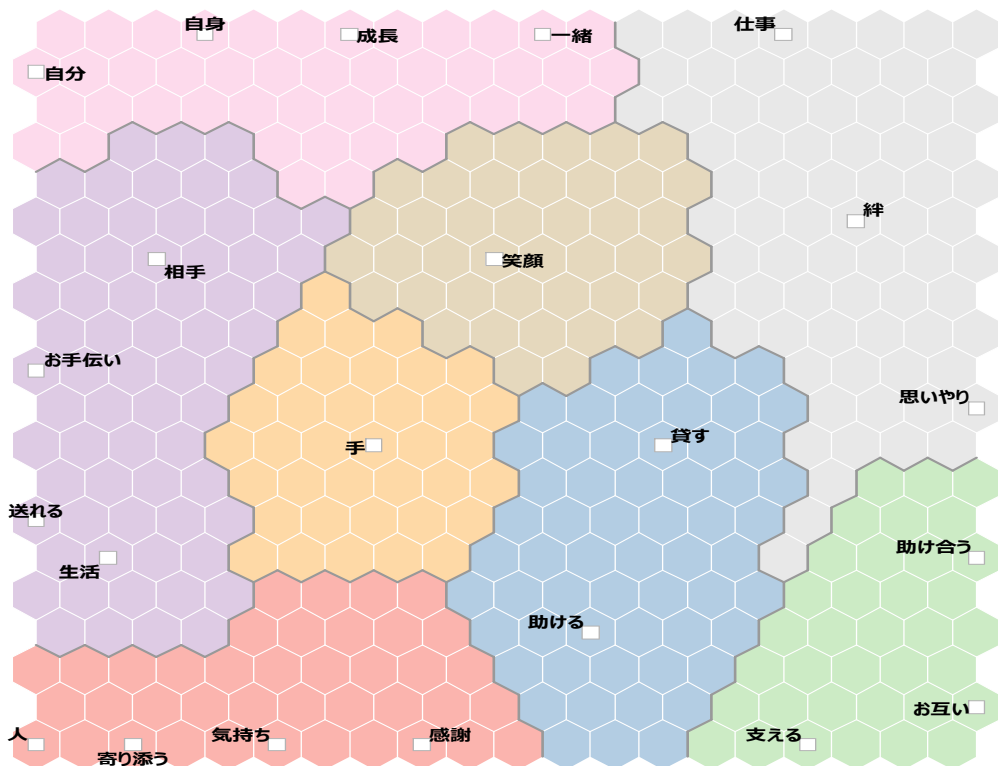


図1. 「私にとって支援とは」の自己組織化マップの結果

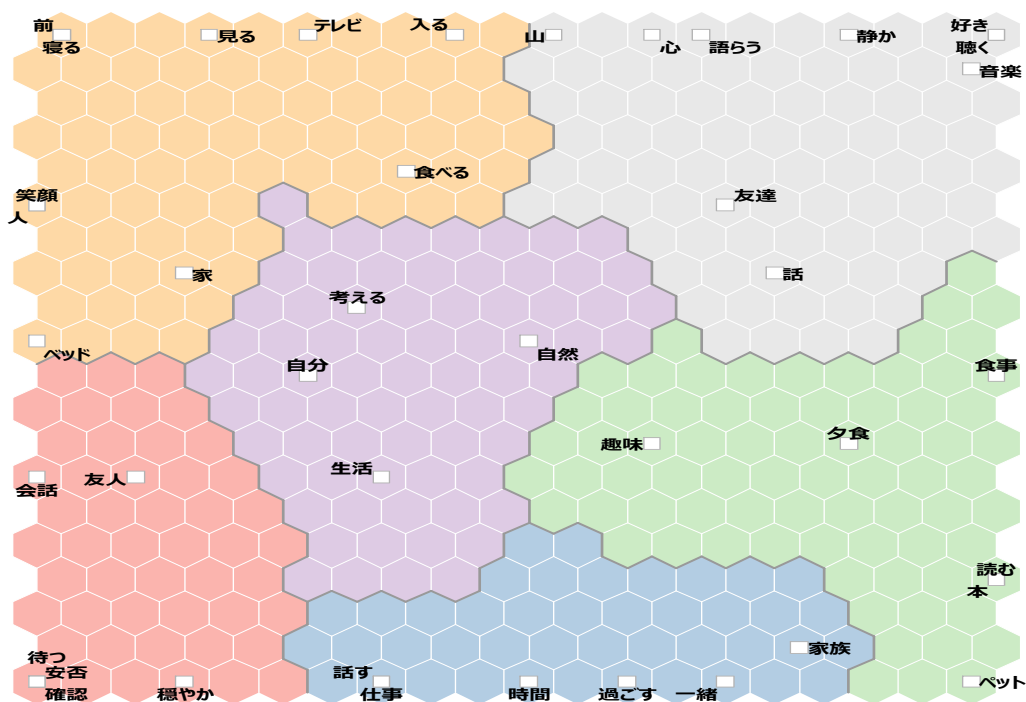


図2. 「心が落ち着くのは」の自己組織化マップの結果

### 3. コーディング

分析対象とした語について、同じ意味の異なる表現や概念的に類似したものをまとめるコーディングを行った。コーディングは、コーディング・ルール（抽出された語をコーディングするためのルール）を作成しながら行われた。コーディング・ルールに沿ったコーディングが回答の原文と一致して行われているかに関して信頼性を担保するために上述の3名で協議しながら、より適切で包括的なコーディングになるように検討を行い、コーディングを行った。

「1. 私にとって支援とは」における予備分析の結果から、クラスターが6つに大きく分類された結果を参考にした。まず1つ目のワードは、「お互いに支援し合う」といった「相互的支援」となった。次に2つ目は「生活」「お手伝い」など、3つ目に「助ける」「貸す」などのクラスターに分類され、別々のコーディングをおこなうよう試みたが、例として「手を貸して生活を送れるようにお手伝いをする」「力を貸して笑顔になるお手伝いをする」となどの反応から、双方のクラスターが支援者側から被支援者に提供される援助としてつながりが見られたため、双方をまとめて「支援者側からの助け・支え」とした。3つ目のワードは、「仕事の一端です」「仕事である」などの反応を「仕事」とした。4つ目は、「自分自身の成長なる」「やりがいを感じる」といった反応から、「有能感・達成感・動機」とした。5つ目は、「相手の立場になって支援する」「その人の気持ちに寄り添うこと」など、被支援者の立場に寄り添って関わる状態とし、「共感的立場」とした。

以上のように5つのコーディングワードにまとめたが、反応をみると、「できない」「ダメにする」

表1. 「私にとって支援とは」のコーディングによる結果

コーディングワード	コーディング・ルール	含まれる単語例
相互的支援	相互に支えあっている状態	お互い, 相互, 助け合う, 支え合う, 思い合う
共感的立場	被支援者の立場に寄り添って関わる状態	同苦, 聴く, 相手の立場, 一緒に事をする, 気持ちに寄り添う, 相手が望むもの,
支援者側からの助け・支え	被支援者に対しての支援	助ける, 手助けをする, 手伝う, 力を貸す, 支える, 自立支援
仕事	支援を仕事の一旦としてみ なす	仕事, 仕事の一環, 日々の仕事, 仕事の一場面
有能感・達成感・動機	なにかを成し遂げたり, そのために努力していること	成長, 続けていく, やりがい, 生きがい, 向上
肯定的感情・性格	肯定的な感情や人間関係, 性格傾向	やさしさ, 笑い, 笑顔, 感謝, 愛情・絆
否定的感情・迷い	支援に対する否定的評価を含む表現	できない, ダメにする, 迷う, 片づかない, 無用の人間, わからない, 考えない

表2. 「心が落ち着くのは」のコーディングによる結果

コーディングワード	コーディング・ルール	含まれる単語例
支援	支援の仕事に関するもの	安否確認, 訪問支援, 支援, 仕事
家族・重要な他者	血縁者, 動物, 親密な関係にある他者	家族, 妻, 夫, ペット, 友達, 友人, 恋人, 子ども, 孫, 家庭, 家
好きなこと・場所・時間	特定の活動・場所・時間が示されているもの	会話, 話す, 遊ぶ, 時間, 好きなこと, 食べる, 寝る, 趣味, おしゃべり
肯定的感情	肯定的な感情に関連する状態	笑顔, 笑う, うれしい, 満足, 楽しい, 幸せ, 満たす, 穏やか,
自然	自然に関すること	自然, 小鳥, 山, 川, 空
一人	一人での状態	一人, 一人で, 自分だけで, 自分自身で,

「迷う」「わからない」などの否定的な感情または迷いに関する反応が見られたことからこのような反応を「否定的感情・迷い」とした。一方, 否定的感情とは反対に「人の優しい気持ちに触れたとき」「やさしさ, 愛情を感じるもの」など肯定的な感情や人間関係, 性格傾向に関する反応を「肯定的感情・性格」とした。こうして, 7つのコーディングワードに分類された(表1参照)<sup>(3)</sup>。

(3) また, 2つ目のクラスターに「笑顔」が含まれていたが, 肯定的な感情を表すことばとして「肯定的感情・性格」に含めた。



次に、「2. 心が落ち着くのは」における予備分析の結果から、クラスターが6つに大きく分類された結果を参考にした。まず1つ目のワードは、「安否確認」「訪問支援」「支援が無事に終わってほっとするとき」などといった仕事に関連する「支援」となった。次に2つ目は「家族」「夫」「友人」などの家族や親密な関係のある人物を示す「家族・重要な他者」とした。3つ目は、「会話」「夕食」「食べる」などの特定の活動、場所、時間が示されたものを「好きなこと・場所・時間」とした。4つ目は、「笑顔」「楽しい」といった肯定的な感情に関連する状態を「肯定的な感情」とした。5つ目は「自然」「山」などの自然に関すること、最後の6つ目は「一人」「自分自身で」といった一人でいる状態を「一人」とコード化し、6つのコーディングワードにまとまった（表2参照）。

#### 4. 対応分析

SCTの記述の内容がどのような特徴をもつのかについて対応分析を行い、その結果を2次元の散布図に示した（図3参照）。この方法では、出現パターンの似通った語にはどんなものがあったのかを探ることができる（樋口, 2014）。分析結果の見方として、まず原点（成分1である横軸と成分2の縦軸それぞれの「0」が交わる点）から距離が離れれば離れるほど特徴が強いとされ、原点付近にプロットされている要素は特徴が比較的弱い（偏りが小さい）といえる。0を起点として、横軸は右が正、左が負の方向となり、縦軸においても0を起点として、0より上が正、下が負の方向となる。

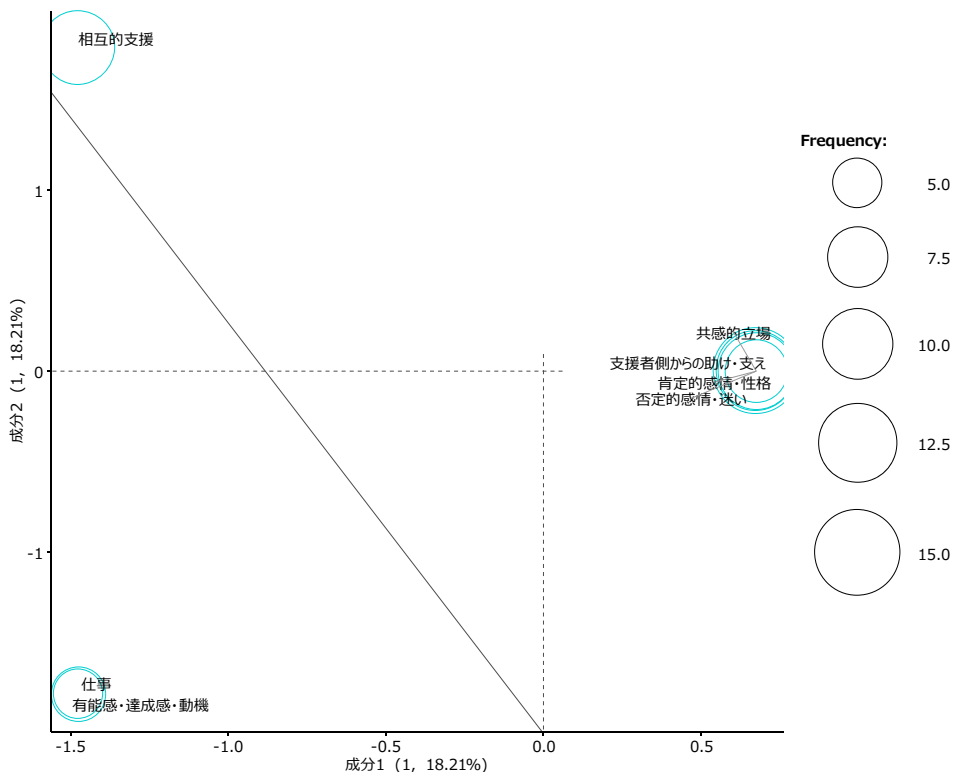


図3. 「1. 私にとって支援とは」の対応分析の結果（全体）

### 1) 「私にとって支援とは」

まず、「1. 私にとって支援とは」の分析の結果、原点付近にプロットされた語は見られなかった。まず、成分1の横軸において寄与が高いのは、正方向では、「否定的感情・迷い」「肯定的感情・性格」「支援者側からの助け・支え」であり、ほぼ重なりあった点にプロットされた。一方、負方向では、「相互的支援」「仕事」「有能感・達成感・動機」の寄与が高いという結果となった。次に成分2の縦軸においては、正方向が「相互的支援」、負方向が「仕事」「有能感・達成感・動機」という結果となった。このことから、第一象限と第四象限の境界線上にプロットされたのは、「否定的感情・迷い」「肯定的感情・性格」「支援者側からの助け・支え」の語であった。また、第二象限には、「相互的支援」、第三象限にプロットされたのは「仕事」「有能感・達成感・動機」であった。

この結果から考えられることは、「相互的支援」と「仕事」「有能感・達成感・動機」の語の距離が原点から共に離れていることから、特徴の強い語ということがいえる。また、「否定的感情・迷い」「肯定的感情・性格」「支援者側からの助け・支え」の語は原点からの距離が先の2つの語に比べて近い距離にあり、原点からの角度（向き）も同じ位置のため、項目間の関連性が強い語を考えらえる。

加えて、PTSD傾向とどのような対応関係であるかと捉えるため、PTSD傾向高・低群（以下、高・低群）を外部変数とする対応分析を行った（図4）。青い丸は「コード」を赤い四角は「外部変数」を表している。対応分析結果は、青い丸と青い丸、青い丸と赤い四角、赤い四角と赤い四角の位置関係をみるものである。まず横軸において寄与が高いのは、正方向では、「仕事」「支援者側からの助

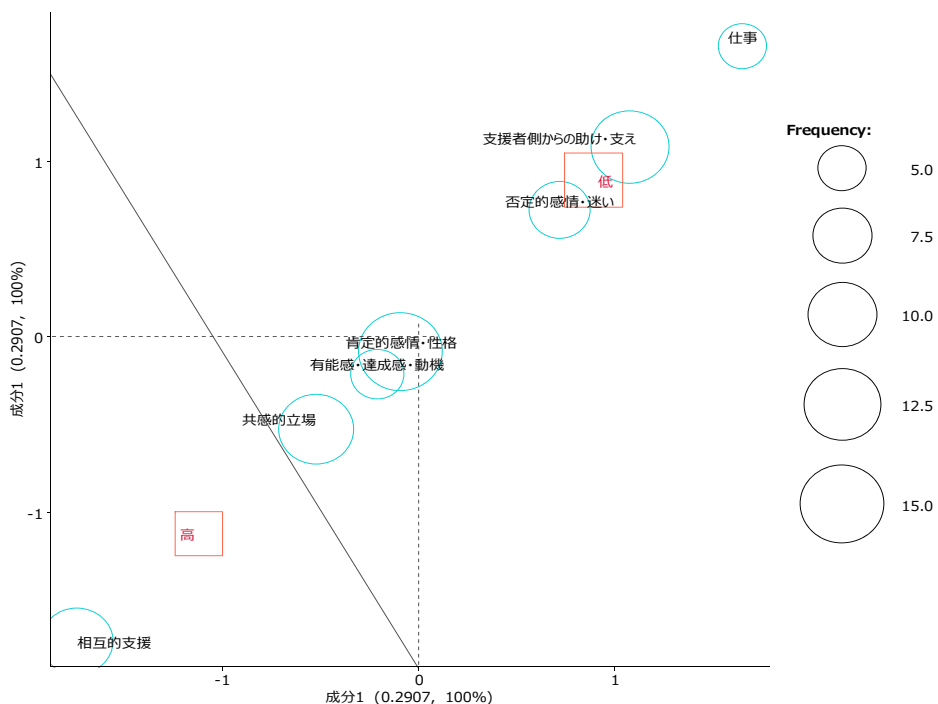


図4. 「1. 私にとって支援とは」の対応分析の結果 (PTSD 高低群)

け・支え」であり、成分2の縦軸においても、正方向が「仕事」「支援者側からの助け・支え」、負方向が「相互的支援」の寄与が高いという結果となった。このことから、本結果からは、第一象限と第三象限のみにプロットされていることが分かる。第一象限にプロットされたのは、「仕事」「支援者側からの助け・支え」「否定的感情・迷い」のワードであった。第三象限には、「肯定的感情・性格」「有能感・達成感・動機」「共感的立場」「相互的支援」であった。

以上のことから、「肯定的感情・性格」「有能感・達成感・動機」などのことばについては、高・低群に比較的共通してみられるコードといえる。その次に、「共感的立場」におけるワードもやや高群に多くみられることばといえるが、原点にまだまだ近いことから、双方に比較的共通する反応と考えられる。加えて、低群に多く見られたことばとしては、「否定的感情・迷い」「支援者からの助け・支え」が挙げられる。そして最も双方の群で対照的な反応だったのは、高群の「相互的支援」、低群においては「仕事」というキーワードが挙げられていた結果となった。このように、高群においては「お互いに助け合う」といったような「相互的支援」の語が共通してみられ、低群に共通として見られた「仕事」としての支援という反応と違いが見られた。つまり、高群は日々の被災者に対する支援の中で、支援者としての自身が共に助け合うといった内的交流を含めたありようをしているとも考えられる。一方、低群は、支援を仕事の一部として考える傾向にあるとも考えられる。また、相互に支援するというよりは支援者側から手助けをするといった「支援者側からの助け・支え」が共通してみられたことから、内的交流を含めるというよりは現実的に被支援者に手助けをする仕事として捉えられている可能性が考えられる。よってこの図からは、軸の意味付けを行うとすれば縦軸の上の方向にいくほど現実的な仕事としての支援ということができ、下の方向にいくほど、共感的立場で接し、被支援者との内的交流を含めた相互作用としての支援ということができる。

## 2) 「心が落ち着くのは」

2つ目の項目「心が落ち着くのは」分析の結果を図5に示した。比較的原点付近にプロットされた語は「家族・重要な他者」「好きなこと・場所・時間」であった。成分の横軸においても正方向に「家族・重要な他者」「好きなこと・場所・時間」が見られたが、原点に近い点にプロットされた。一方、負方向では、「自然」の寄与が高いという結果となった。次に成分2の縦軸においては、正方向が「支援」「肯定的感情」、負方向が「一人」という結果となった。このことから、第一象限と第四象限の境界線付近にプロットされたのは、「家族・重要な他者」の語であった。また、第二象限と第三象限の境界線上にプロットされた第三象限にプロットされたのは「自然」第四象限にプロットされたのが「一人」という結果となった。

この結果から考えられることは、「支援」と「肯定的感情」「自然」「一人」の語の距離が原点から共に離れていることから、特徴の強い語ということがいえる。また、「家族・重要な他者」「好きなこと・場所・時間」の語は原点からの距離が近い距離にあり、原点からの角度（向き）も同じ位置のため、項目間の関連性が強い語を考えられる。

加えて、PTSD傾向の高低とどのような対応関係であるかと捉えるため、高・低群を外部変数とする対応分析を行った（図6）。まず原点付近にプロットされたのは、「家族・重要な他者」「肯定的感情」

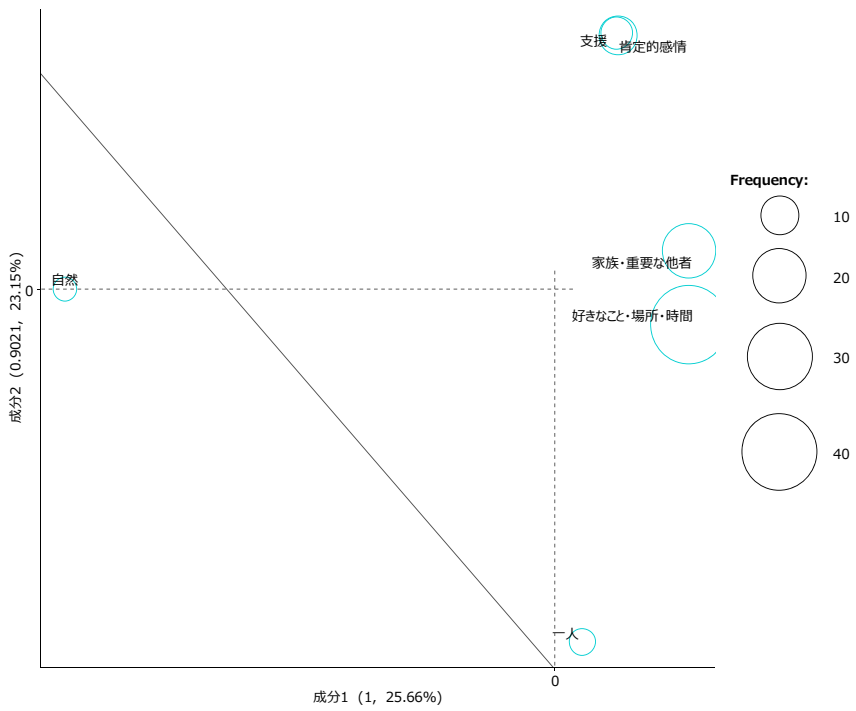


図5. 「2. 心が落ち着くのは」の対応分析の結果 (全体)

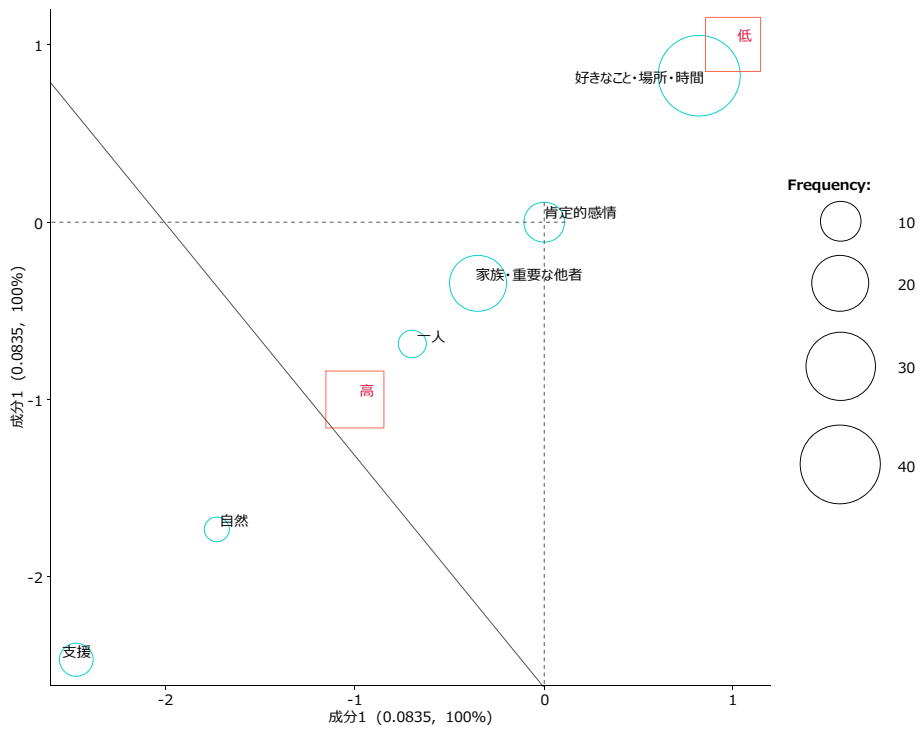


図6. 「心が落ち着くのは」の対応分析の結果 (PTSD 高低群)

であった。このことから、2つの語については、高・低群に比較的共通してみられるコードといえる。また、最も双方の群で対照的な反応だったのは、高群の「支援」、低群においては「好きなこと・場所・時間」というキーワードが挙げられていた結果となった。このように、高群においては「安否確認ができたとき」といったような「支援」の語が共通してみられ、低群に共通として見られた「好きなこと・場所・時間」という反応と違いが見られた。つまり、高群は日々の支援の中で、被災者の安否確認ができたときなど、支援に関連することに関して心が落ち着くというありようが見受けられる。一方、低群は、「好きなこと・場所・時」が共通してみられたことから、支援に関することというよりは、仕事とプライベートを切り離し、自分の時間に好きなことを行うことで心を落ち着かせているとも考えられる。よってこの図からは、軸の意味付けを行うとすれば縦軸の上の方向にいくほど支援の仕事から離れて自分のプライベートを重視することが心を落ち着かせる傾向が強いといえる。

## 5. 共起ネットワーク

続いて、各コードの共起ネットワーク図を作成した。これにより、どのコード同士が共起しやすいかという、コード間での結びつきの強さを検討することができる。本研究では、図の精緻さと見やすさを考慮に入れた。図に示される共起ネットワーク図において、コード名は丸で記されている。その丸が大きいほど、そのコードが当該の支援イメージに出現した頻度が高いとすることができる。さらに、各コード間を結ぶ直線は、それらのコード間の共起性を示し、線が太いほど共起性が強いことを意味している。また、コード間の直線上に共起性を表す指標である Jaccard 係数を表記した。本研究では .05 以上を相対的に共起性が強いと判断した。なお、コード間の距離は、特に意味を持っていない。

### 1) 「私にとって支援とは」

まず、「私にとって支援とは」の結果を図7に示した。そこでは、大きく2つのカテゴリーに分けられた。1つは、「仕事」「有能感・達成感・動機」に強い結びつきが見られた .1。次に、「支援者側からの助け・支え」の中心性が高く、そのコードを中心に、「肯定的感情・性格」.08、「否定的感情・迷い」.05と各々が「支援者側からの助け・支え」と強い結びつきが見られ、「共感的立場」は .04 という結果となった。

この結果から、支援者全体として共通してみられるコードの結びつきとしては、「仕事」と「有能感・達成感・動機」が一つのカテゴリーとなった。例えば、「自分を向上させてもらえるような大切な仕事の一場面」といったように、支援に対して向上心や成長ができる「仕事」としてイメージされていると考えられる。一方のカテゴリーは、「支援者側からの助け・支え」の中心性が高く、そのコードを中心に、「肯定的感情・性格」「否定的感情・迷い」との結びつきが強いという結果となった。このことから、例えば、「笑顔になるお手伝いをする」「支援をしても簡単に片付くものではない」「常に相手の立場になってお手伝いをする」などといったように、支援の中で生じる肯定的・否定的、また迷いなど様々な感情についてカテゴリー化されているといえる。

次に、高低群において、どのコード同士が共起しやすいかという、コード間での結びつきの強さを検討した(図8参照)。まず高群から見ると、「相互的支援」との相関が最も高く .30 という結果となった。次に、「肯定的感情・性格」.18、「共感的立場」.17と続き、そのあとに「有能感・達成感・

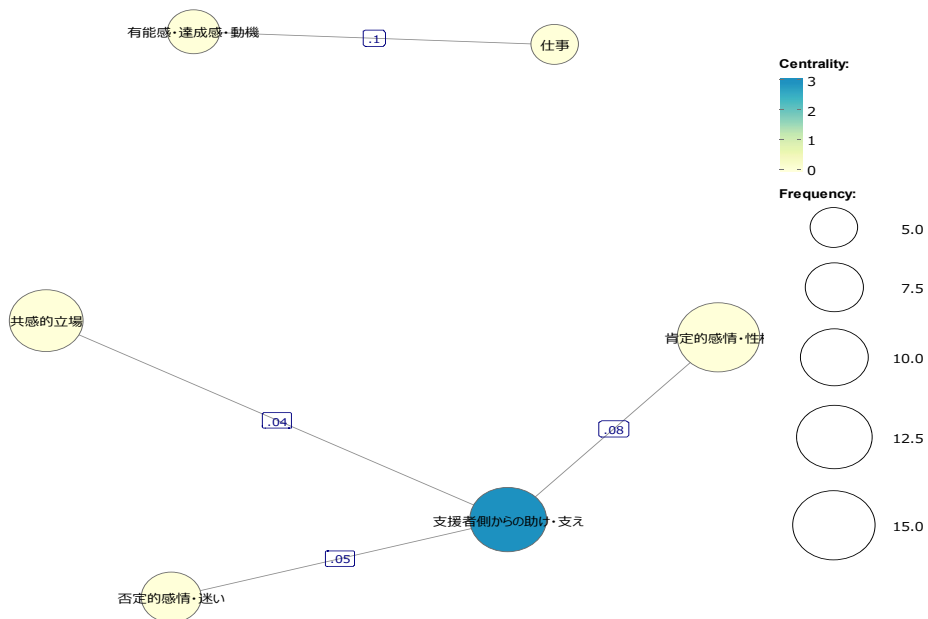


図7. 「1. 私にとって支援とは」の共起ネットワークの結果（全体）

動機」.09, 「否定的感情・迷い」.06, 「支援者側からの助け・支え」.05となった。また, 「仕事」については関連性が見られなかった。

一方で, 低群を見ると, 最も関連性が見られたのは「支援者側からの助け・支え」.29であり, 続いて「肯定的感情・性格」.19, 「否定的感情・迷い」.16, 「仕事」.14, 「共感的立場」.12「有能感・達成感・動機」.08, 最も関連性が見られなかったのは「相互的支援」.02という結果となった。加えて, 両群において結びつきが強く見られたものは, 「肯定的感情・性格」, 「有能感・達成感・動機」「共感的立場」「支援者側からの助け・支え」「共感的立場」「否定的感情・迷い」であった。

以上のような結果から, 高群においては「相互的支援」との相関が最も高く, 次に「肯定的感情・性格」「共感的立場」との結びつきが見られた。このことは, 対応分析における第三象限に「相互的支援」「共感的立場」「有能感・達成感・動機」「肯定的感情・性格」がプロットされていたことから, 上記の分析を支持する結果となった。このことから, 高群においては, お互いに支援しあうという相互の交流をイメージする反応が多かったといえる。

## 2) 「心が落ち着くのは」

「心が落ち着くのは」の結果を図8に示した。まず, 「好きなこと・場所・時間」の中心性が高く, 「家族・重要な他者」に強い結びつきが見られた .29。「一人」.04, 「支援」.02とは強い結びつきは見られなかった<sup>(4)</sup>。次に「支援」と「肯定的感情」に強い結びつきがみられた .14。全体の共起ネットワーク図から .05以上の強い結びつきを示したものは以上の2つであった。

(4) これは「一人でテレビをみるとき」「支援の仕事が終わってほっと一息しているとき」などの反応が該当している。



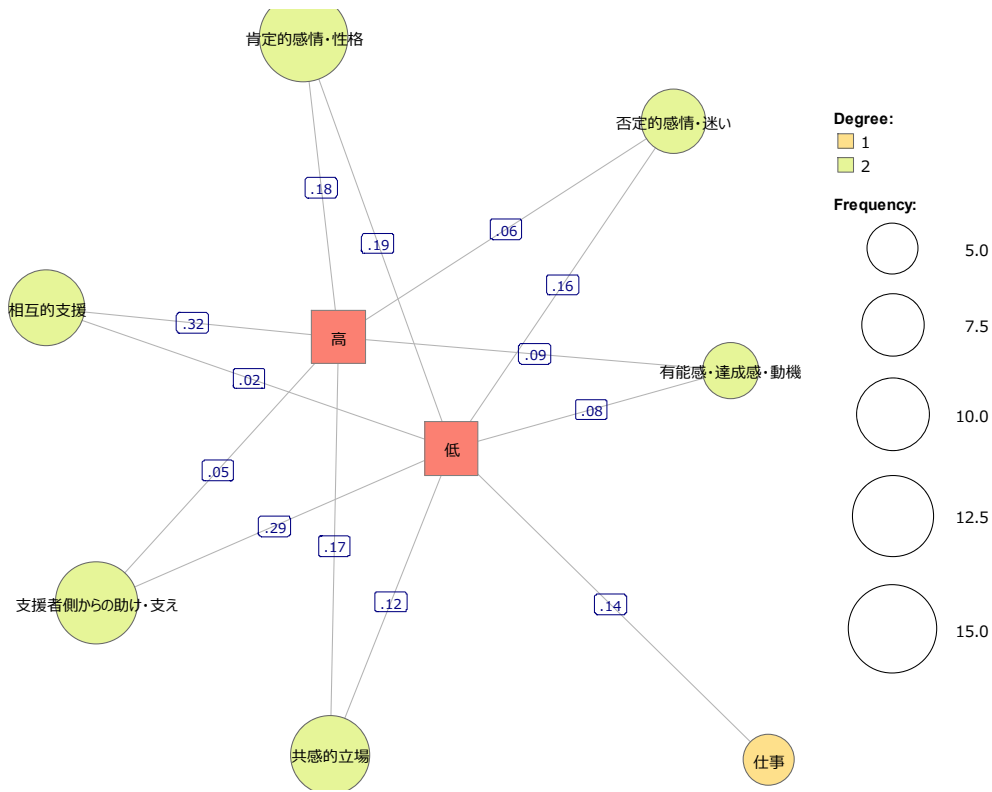


図 8. 「1. 私にとって支援とは」の共起ネットワークの結果 (PTSD 高低群)

この結果から、「2. 心が落ち着くのは」について、支援者全体として共通してみられるコードの結びつきとしては、「好きなこと・場所・時間」と「家族・重要な他者」が一つのカテゴリとなった。例えば、「家族と一緒に夕食を食べること」といったように、家族や重要な他者と好きなことや時間を共有するといった傾向が見受けられた。一方の特徴的なつながりとしては、「支援」と「肯定的感情」の結びつきであった。このことから、例えば、「安否確認で、住民の方との会話で穏やかな気持ちになるとき」といったように、支援の中で生じる肯定的な感情についてつながりがあるといえる。

次に、高低群において、どのコード同士が共起しやすいかという、コード間での結びつきの強さを検討した(図8参照)。まず高群から見ると、「家族・重要な他者」との結びつきが最も高く.31という結果となった。次に、「好きなこと・場所・時間」.25「支援」.2、「肯定的感情」.15と続き、そのあとに「一人」.1、「自然」.07と強い結びつきが見られた。一方で、低群を見ると、最も関連性が見られたのは「好きなこと・場所・時間」.5であり、続いて「家族・重要な他者」.15、「肯定的感情」.12、「一人」.05であり、「支援」「自然」との関連性は見られなかった。加えて、両群において結びつきが強く見られたものは、「家族・重要な他者」「好きなこと・場所・時間」、「肯定的感情」「一人」であった。

以上のような結果から、高低群において共通する点が見られたものの、各々に違った特徴も見られ

た。まず、高群においては、「家族・重要な他者」との関係がもっとも強く次に「好きなこと・場所・時間」という結果から、まず家族や大切な人と過ごすことが心を落ち着かせることが特徴的であった。このことから、家族や重要な他者と好きな活動を何か行ったり、時間を過ごしているということがわかる。また、「支援」に関するコードとの強い結びつきが見られ、対応分析の結果でも見られたように、被災者とのかかわりによってもたらされる心の落ち着きという反応が見られた。また、「一人」「自然」との結びつきが見られた。この結果から、人間関係などから離れて、自然に触れたり、一人であることによって心を落ち着かせていると考えられる。一方、低群は、「好きなこと・場所・時間」との結びつきがもっとも強く、その次に「家族・重要な他者」であった。このことから、高群のように、家族や友人などの大切な人物と好きな活動をしたり、時間を過ごすというよりは、まず自分の好きな活動や時間を過ごしたりするという共起が強いことがわかった。

このようなことから、低群においては、支援に関することというよりは、仕事とプライベートを切り離し、自分の時間に好きなことを行うことで心を落ち着かせているとも考えられる。

### 全体的考察

本調査では、SCTを実施し、IES-R得点の高低群において、ことばによるイメージを手がかりに検討を行った。その結果、PTSD傾向高群において特徴的な傾向が見られた。高群においては、支援に対して被災者の方と互いに支援しあうとった相互的交流の傾向がみられ、また、そこでの関わりによる

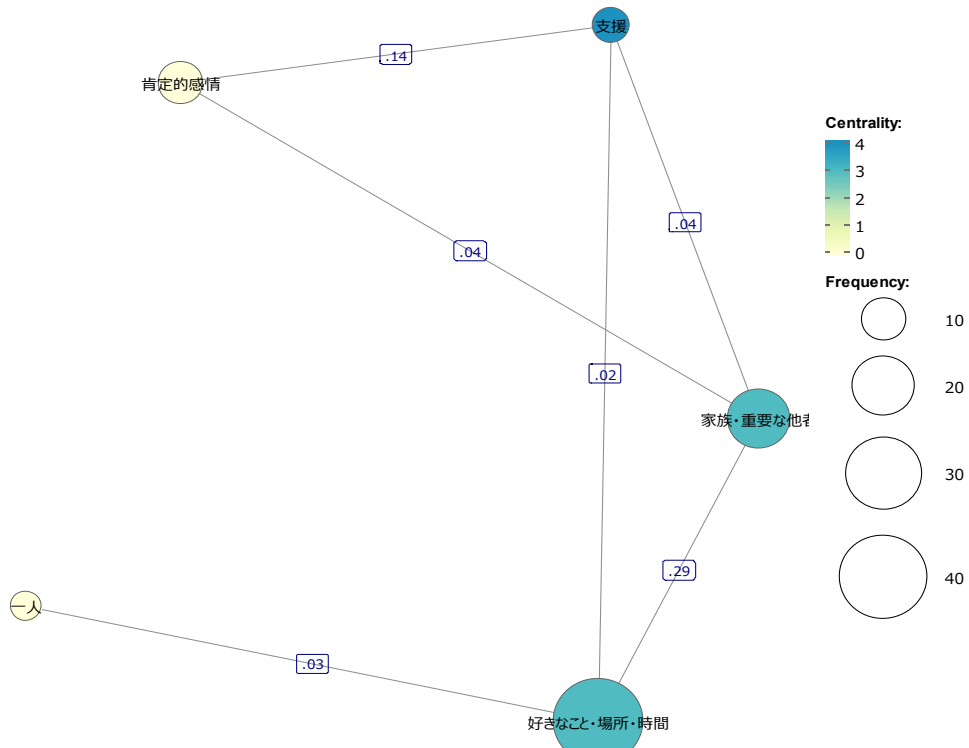


図9. 「心が落ち着くのは」の共起ネットワークの結果（全体）

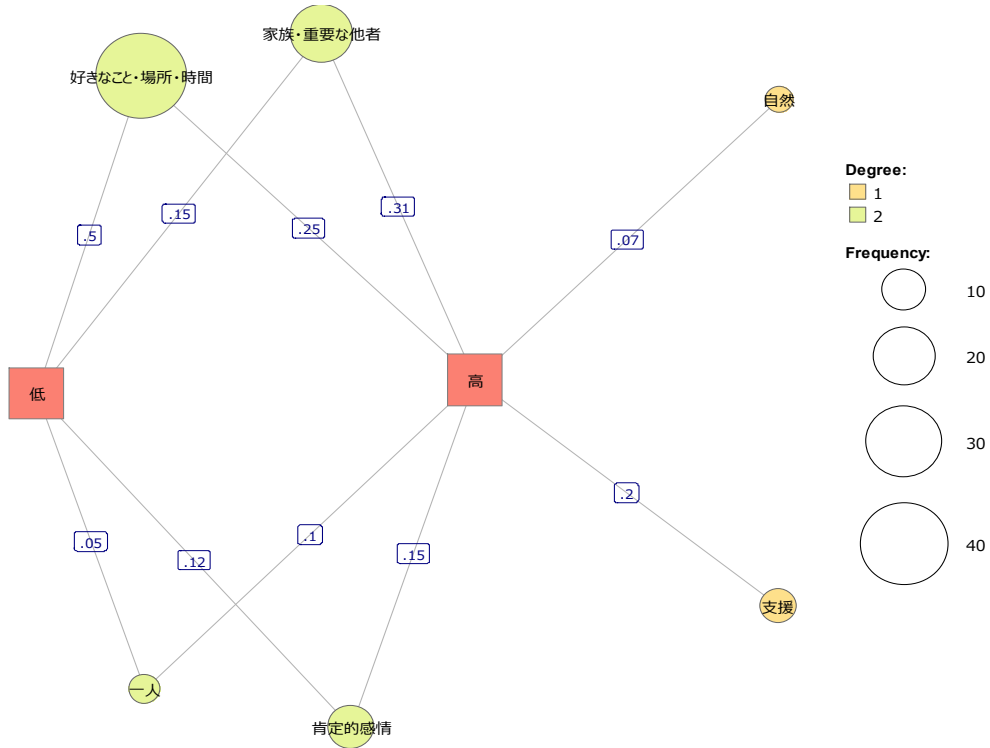


図 10. 「心が落ち着くのは」の共起ネットワークの結果 (PTSD 高低群)

安らぎが心の落ち着きとなっていると考えられた。また, Raphael (1989) は, 被災者と救援者との間には特殊な関係が生まれるとし, 両者の役割依存性と被災者側のニーズのために, それは強固な絆になるかもしれないと述べている。また, もう一つの側面として, 共感と一体感を挙げており, 災害という危機状態は, 被災者と支援者を情緒面で近づける傾向があると述べている。このことから, 本研究の調査からも高群においては, 互いに支援し助け合い, 支援を無事に遂行することで落ち着くといった反応がみられた。

高橋 (2018) は, コラムの中で「支援は双方向だとつくづく思う。支援者から被災者への一方的なサポートという支援ばかりでなく, 被災者自身がみずからの力で立ち上がるという視点を欠いた対策はどこか不自然な流れを創り出してしまうのではないかと反省した」と述べている。このことから, 仕事として割り切って, 支援者からの一方的なサポートとした方がストレスも少なくすむとも考えられるが, 自らも被災している人たちも多く, 共に生きるという考えのもと支援に携わっているかもしれない。そのように考えると, 支援に対してお互いに支え合うというイメージは自然な反応もいえる。

また, 堀口 (2017) の災害支援者を対象とした質問紙調査からは, バーンアウトにおける得点と PTSD 傾向の相関を見た結果から, 個人的達成感 (やりがい) を感じているほど, IES-R 得点が高いという相関が見られた。また, 上田 (2006) は, 警察官における二次受傷の調査から, 被害者から衝撃

的な事件の報告を聞き、二次受傷をうけた者は、職務に対して否定的（負担感、腹立たしさ）にも、肯定的（成長、生きがい）にも捉えていたことが報告されている。さらに、そのような中でどのように彼らが心を落ち着かせているのかについて「2. 心が落ち着くのは」の結果をみると、高群は「支援」に関することと結びつきが強いことがわかった。そのような「支援」の反応をみても、「支援が無事に終わってほっとするとき」などの反応も見られた。このような結果は、堀口（2011）の海岸救援者を対象とした調査からも報告されている。

中井（2004）は、戦時と平和時の基本構造が根本的に異なることについて、「平和時には安全保障が基準であってそのなかに安全への脅威が点在しているが、戦時において安全保障は原理的に撤回され、安全脅威が地平線まで続く中に猶予としての安全がある。このように構造が逆転している」と述べている。この「安全脅威」という概念に依拠すれば、災害支援者は、常にいつまた地震何が起こるかわからないという持続した緊張や不安の中で活動しているといえる。その中で、一日支援が無事に終わってほっとするとき、それは束の間の休息であり、一日のほんの短い時間であるといえる。このように考えると、高群においては、「脅威の中にある一部の安全」という逆転した構造の中にいる可能性も示唆されうる。

以上のようなことから、ストレスが高いとしても、その方たちが支援という仕事に対して個人的な達成感や生きがいを感じ取り組んでいる可能性が考えられる。前向きに支援に取り組み被災者にも熱心に関わることは、被災者の内面により深くかかわる点もあることから、自らのストレスを高めてしまう可能性もある。従来、仕事に対してストレスが少ない方が仕事にやりがいや達成感をもつという考え方もあるが、今回の調査結果から、支援にやりがいを感じながらもストレスが高いという結果が見られたことから、従来とは別のひとつのモデルの在り方を模索する必要性があるといえる。

さらに、今回の結果から、支援者の中に被災した経験がある者が被災していない者と比べて有意に多いという結果となった。高橋（2018）によれば、最近問題になっているのは、被災地の行政職員に疲労度が高く、メンタルヘルス体制が手薄な面は否めないと指摘している。続けて関東・東北豪雨による常陸市水害、熊本地震では、災害地域の行政職員は自らも被災しながら、市民の生活再建に尽力しており、被災者と支援者の二重のストレスを受け、燃え尽きなどの心身の不調をきたすことがあったと述べている。本調査の対象者においても、DPAT(Disaster Psychiatric Assistance Team)のように被災地外部から一定期間、支援に入っている人たちではなく、被災地に生活の基盤を持ち、主に自治体で雇用され支援に携わっている方が多かった。このような先行研究の報告からも、「自らも被災しながらも被災者の支援に携わる者」特有の心理的特徴があるといえる。また、専門の救援者はその職について3ヶ月ほどで、一般の人が一生にわたって経験するストレスを経験すると指摘されているほどである（高橋、2018）との報告もあることから、支援側の立場だけではなく被災しているという二重のストレスを抱えながら支援活動を行う人達に対する支援の在り方を構築する必要性があると考えられる。宗像ら（1988）は、バーンアウトを防ぐ要因として、情緒的支援者の存在が有意な影響力を持っているとしている。また、様々な先行研究からも指摘されており、支援者支援をどのように構築していくかが今後の課題になるといえる。

## 今後の課題

本論文は、災害支援者を対象にSCTでの支援に対することばのイメージを検討した。また、そのイメージがPTSD傾向高低群に分けた場合、その差異がどのようなものであるのかを検討した。しかしながら、そのような群分けを行い、その特徴を抽出する一方で、個の語りの流れが捉えにくいという欠点もある。筆者は、個別にインタビューを行い、その面接内容とSCTを補助資料として検討も試みたが、やはり、個の文脈を捉えるには、限界があると思われた。今後は、個の語りを取り上げて検討することも視野に入れていきたいと考えている。また、対象者数が十分に確保できなかった点においても、今回の結果から母集団を推定し、一般的傾向を見出すには限界があるといえる。今後は、より多くの対象者を対象に検討する余地が残されている。また、本SCTにおける刺激語についてもより修正が必要と思われる。今回、分析対象の項目を2つに焦点づけて行ったが、今後は他の項目を含めた包括的な検討が必要となる。加えて、より災害支援者の内的な理解に寄与するためには、さらなる予備調査を行い、吟味を重ねていく中で、より継続的な検討が望まれるといえる。

## 謝辞

本論文は多くの方によって支えられました。質問紙や面接の調査に参加頂き、その内容を快く許可して下さった支援者の方々に心よりお礼申し上げます。

また、震災や津波により亡くなられた人々のご冥福をお祈り致します。本当に様々な人々の支えによって本論文を書くことができました。こころよりお礼致します。

なお、本研究は科研費25885109の助成をうけた。

## 引用文献

- American Psychiatric Association (2013) Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fifth edition, DSM-5. American psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕監訳 (2014) 精神疾患の診断・統計マニュアル DSM-5. 医学書院)
- 飛鳥井望 (1999) 外傷後ストレス障害 (PTSD) 臨床精神医学増刊号 28 171-177
- 畑中美穂・松井豊・丸山晋・小西聖子・高塚雄介 (2004) 日本の消防職員における外傷性ストレストラウマティック・ストレス, 2(1), 67-75
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—ナカニシヤ出版
- 樋口耕一 (2017). KHCoder <http://khc.sourceforge.net/>
- 堀口真宏 (2011) 海岸救援者SCT作成の試み—SCTのことばのイメージを手がかりにして— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 第14号 p 98-112
- 堀口真宏 (2017) 東日本大震災における災害支援者における心理的負担 大阪観光学大学紀要第17号 p 35-42
- 岩井圭司 (1998) 災害救援者のPTSD—阪神・淡路大震災被災地における消防士の面接調査から—精神科治療学 13(8) 971-979
- 岩井圭司 (2002) 災害救援者—阪神・淡路大震災の救援業務に従事した消防職員と、避難所の運営にあたった公立学校教職員の健康調査にみられたPTSD症状— 臨床精神医学 増刊号 131-138

- 神代尚芳（1999）救援者のバーンアウト症候群　こころの科学　65　63-67　日本評論社
- 加藤寛（2000）災害救援者の被る心理的影響　兵庫県長寿社会研究機構研究年報　6　87-96
- 加藤寛・飛鳥井望（2004）災害救援者の心理的影響－阪神・淡路大震災で活動した消防職員の大規模調査から－トラウマティック・ストレス　2(1), 51-59.
- McFarlane A. C., PaPay, P. (1992) Multiple diagnoses in posttraumatic stress disorder in the victims of a natural disaster. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 180, 498-504
- 宗像恒次, 高橋徹, 稲岡文昭, 川野雅資（著）（1988）燃えつき症候群　金剛出版
- 中井久夫（2004）震災後10年目の覚書　臨床心理学　4(6)　763-768
- 大山泰宏（2012）何が人を幸福にし何が人を不幸にするか：一国際比較調査の自由記述分析－心理学評論　55(1), 90-106.
- 心理学評論刊行会
- Raphael, B. (1989) When disaster strikes how individuals and communities cope with catastrophe　石丸正（訳）災害の襲うとき－カタストロフィの精神医学　みすず書房
- Robinson, H. M., Sigman, M. R., Wilson, J. P. (1997) Duty related stressors and PTSD symptoms in suburban police officers *Psychological Report* 81 835-845.
- 駿地真由美（2006）遺伝SCT作成について　伊藤良子（研究代表者）遺伝子治療における心理臨床的援助に関する研究　pp.21-31
- 高橋晶（2018）災害支援者支援　日本評論社
- 上田鼓（2006）警察官における二次受傷の男女別規定要因についての研究　トラウマティック・ストレス　4(2)　75-83
- Ursano, R. J., Fullerton, C. S., Vance, K. et al. (1999) Posttraumatic stress disorder and identification in disaster workers *American Journal of psychiatry* 353-35
- 読売新聞（2011）2011年6月11日, 読売新聞, 朝刊, 東京版
- 財団法人地方公務員安全衛生推進委員会（2003）消防職員の現場活動に係るストレス対策研究会報告書